

## 動機: 「ことば化」 について

「ことば化」とは、今・ここに存在する感情・思考が、「ことば=表層言語表現」となって収斂してくるプロセスである。脳という通常外側からは観察不可能である記憶保存本体が、「外界に聞こえ、見えるような言語表現を産出する」その過程である。「潜在」するものの「顕在化」である。Ferdinand de SAUSSURE 以来の記号学的用語を使って、Langue から Parole が創り上げられるその過程と言ってもよい。Noam CHOMSKY が称した Competence から Performance が出来るその中途段階でもある。今回シンポジウム招聘講師細川英雄が最新著書で「考えていること=内言を音声や文字によって表出させる外言化」<sup>1</sup>と称するその行為の「形成途上」である。さらに言えば、あるケーキのレシピに沿って必要材料の混入・攪拌後、オーブンに入れて焼き上がるのを待つ、その「ケーキ形成経過」と例えてもいい。要するに「でき上がった結果」ではなく、そこに至るまでの「中途段階」を指すのである。

このことば化というプロセスを常に見つめる続けることは、母語=日本語と中間言語=ドイツ語・英語の中で生きる私にとっては、公・私的世界で健康に生きるための不可欠条件である。なぜなら私は、この過程にしっかりとモニターチェックをかけることによって、自己の精神衛生+アイデンティティ均衡を保持することができ、延いては自・他者の精神衛生と直接に関わる日本語教育研究実践もうまく行くと信ずるからである。

私は27歳で日本社会を「降り」、北米で4年間学生生活をし、その後ドイツに来て以来24年を、学生・院生（8年）→日本語講師（6年）→大学日本学科教員（10年）として生きてきているが、考えてみると私の思考探索の対象はいずれの人生段階においても「ことばの形成過程」である。中でもこの「ブラックボックスへの働きかけとその結果生成のメカニズム」という言語哲学的問題に一番真剣に勉強に取り組んだのはルール・ボーフム大学で記号学を専攻したときであるが、そこでは「深層内部言語の表層化過程」の理論的枠組の基礎を得た。今は日本学科ゼミで日独翻訳やドイツ母語者による日本語習得に関する実践研究に没頭する日常生活の中、私は自分そして他者（特にドイツ語母語者の日本語学習者）の「内言の外言化プロセス」のさまざまな発現形態に魅惑され続けている。従って「自分の興味のあることについてレポート作成をする」という課題が日本語教育シンポジウムの場で細川講師から提出されたとき、まっさきに脳内に浮かび上がってきたテーマも、私の推理小説的解明意欲を最もそそる「ことば化」であった。

以下の考察に先立ち、「ことば化」とは「表層言語表現の起ち上がりプロセス」であると定義しておく。

## ディスカッション: 「ことば化モデル図:表現選択力・構文力」から「日本語教育理念」へ

さて、私という「一個体山田頼子」は上述の個人史をもって世界と関わり、必要に応じて「ことば化」に励むわけであるが、この「表層言語表現の起ち上がりプロセス」をまず図1のようにモデル化してみよう。その後、このモデルを基に、私自身の言語体系使用能力について考察を加え、さらに日本語教育理念という枠組にまで進展させてみたい。

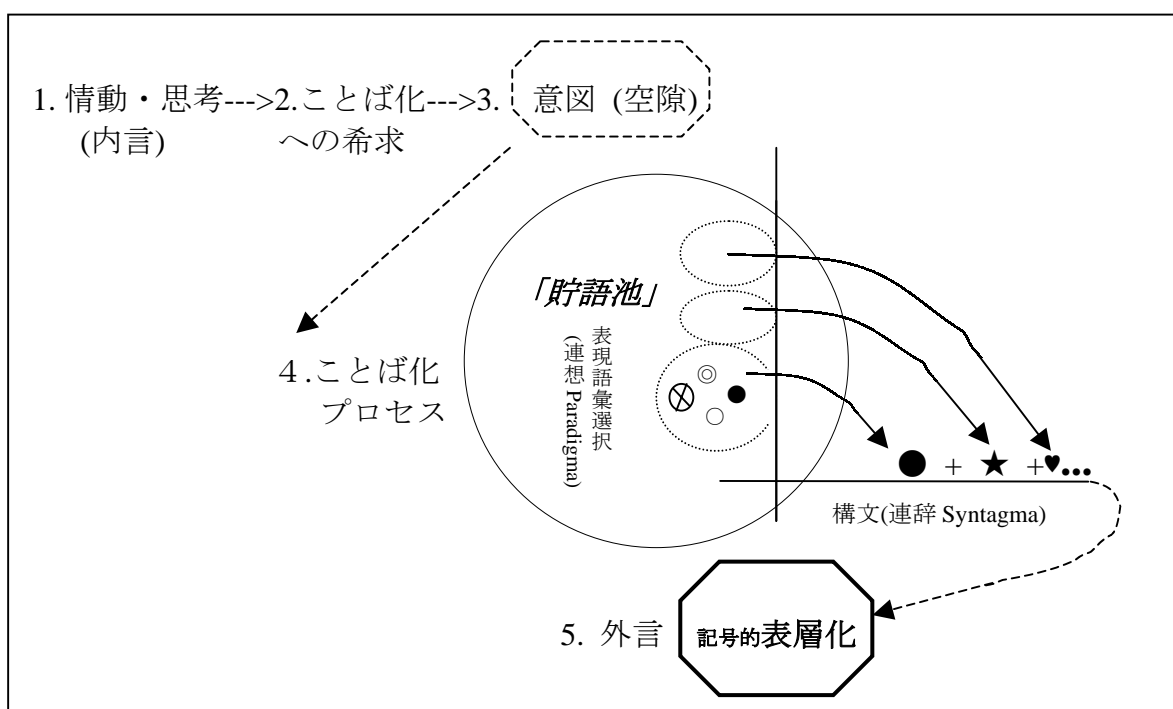


図1: 情動・思考 (内言) →ことば化プロセス→記号的表層化 (外言)

### I. 「ことば化」モデル図

#### <1. 情動・思考>

個として世界に関わる私は、刻一刻と変化していく環境世界の現象を身体五感・精神面を通して再構築する。その構築に対する反応が「情動面内言」なら日本語で外言化する場合「すごい！嬉しい！感激！感銘！ぞおーっ！ふにゃっ！おいしい！くやしーっ！あほ！」などの間投詞として発露する感情である。「思考面内言」なら、「自然言語・図絵・メタファー/メトニミー」など各記号体系に沿った具現化になる。この「前ことば化段階」がどのくらい私の「意識」に上るものなのかは、脳内外の「揺さぶり」の度合いによっても、また次段階の「ことば化への希求」の強さによっても異なる。

## <2. ことば化への希求>

「前ことば化情動・思考」内容は、最終的にことば化への希求があるとき、すなわち私の中で「この内容を記録に残しておきたい・誰かに伝えたい」という欲求があるとき、表層化へのプロセスを辿り始める。この「誰か」は必ずしも「他人」とは限らない。「内なる他者」がそのコミュニケーションの対話相手になることもある。「ことば化への希求」のきっかけとしては私個人の内部から突き上げてくる自己開示への衝動の場合もあるし、外部からの依頼・要請の場合もある。また外部からの要請がきっかけであっても、そこから「希求」を内面化し、結果的に自己開示テキストになることもある。例えば「ことば化」というプロセスについてのレポート作成を求められた今回シンポジウム一参加者としての「私」は、自己のこれまで折に触れ感じ、考えてきた「ことば化問題」をテーマに取り上げることを決意し、その決意が私を「ことば化=テキスト化への歩み」に駆り立てる。

## <3. 内言の籠もる「空隙」>

「内言」としての「情動・思考内容」は、「話したい・伝えたいという意志」を通して、より明確に立ち現われてくるが、まだこの段階では内言が具象化されていないため、私は「空隙」に対峙しているという意識を持つ。この「内言の籠もった空隙」を私は徐々に「ことば化」という作用を通して、テキストに変換していくのだ。ネガティブ映像をポジティブ映像に変化させていくように、私は「空隙領域」を狭めていく。

## <4. 「ことば化プロセス」 - 表現選択と構文>

私の「心的空隙に籠もっている内言」は、「ことば化作用」により次第に顕在化されていく。このことば化作用は、図1にモデル化されたように「連想軸 Paradigm」と「連辞軸 Syntagm」の両軸により決定される<sup>2</sup>。総ての言語作用において、私はこの両軸を活性化し、まず必要語彙を選択し、それからそれらを統語原則(文法)に従って構文するのである。

まず、私の脳内・深層レベルの「言語表現の溜め池」(=図1 大円によって象徴)が活性化される。私はこの「記号レパートリー」を貯水池ならず「貯語池」と呼ぼう。この貯語池には、これまで私の個人史を通して獲得された総ての言語表現が意味論・構文的にネットワークされ、貯め込まれている。動物生態学創始者 Konrad LORENZ はこれを「observation records」、フランス記号学者 Roland BARTHES はこれを「languages's image-reservoirs」、同 Julia KRISTEVA は「chora =receptacle for the semiotic desposition」と呼んだ<sup>3</sup>。私がまことに自分勝手ながら私個人の日本語家庭教師と敬愛申し上げる作家丸谷才一氏は日本語に関する著書の至る所で私達の紡ぎだす言葉が

いかに先人の伝統の上に立っているか - 従って、よい文章を読むことが大切であるか - を強調している。私の記号作用はこの貯語池を活性化するところから始まる。

私は、この「貯語池」に必要な語群よ、集まれ！」と魔法の杖を振る。「魔法の杖」としか言いようがないのは、ヒトのこと言語記号体系の使用能力全般に対する畏敬をあらわしたいからである。号令がかかると、構文要素のそれぞれ(=図1 ○ ●相当、★相当、♥相当などの項目別)に、品詞・音響・形態・書字イメージなどの「ネットワーク的連想」によっていくつか候補記号が起ち上がってくる。号令は、「第一カテゴリーとしてのマル的項目」を例に取れば、「マル的なものよ、集合！」として発せられ、類語辞典中の「マル的項目」(、●、○、⊗....)がその類似性によって集合してくる。その中から私は意識的・無意識的に適当な語彙表現を選択する。こうして選択された言語要素は、文・段落・談話レベルを含む「文法」に沿って、連辞軸上に線上的に並べられる(● + ★ + ♥...)

おもしろいことに、この類語辞典項目は必ずしも同一言語内範疇とは限らない。ドイツ語を始め、蓄積された言語体系から候補記号が集まってくる。そのうちの記号が最終的に選択されるかは、さまざまなコミュニケーション要素によって決まってくる。例えば相手が日本人であってもドイツ滞在の長い相手と話す時は、どうしても日本語構文の中にドイツ語(特に名詞、形容詞)の混入が多くなる。お互いにCode-Switching なしでわかり合える相手を目の前にしているので「翻訳」をがんばらないという「怠惰な自分」を苦笑しながら見ている。

これらの一瞬はまた私にとって自分が「ドイツ語でものを考えている時空間にも存在している」ことを確証する瞬間でもある。そこでドイツ語で表層化してくる「内言」は、ドイツ語でしかいいようがないのであるから、その表現は私にとって「母語」でしかないのである。血肉になった私自身の言語表現で、それらには母語表現のように色も匂いもついている。その意味でそれらの表現は「母語」と同レベルに存在する、と言ってもいい。もし「母語」という名称を各自然言語という一般構造レベルから「各言語表現」というサブレベルにまで応用するならば！

ジョイスの『ユリシーズ』を待つまでもない。私の潜在的言語材料の倉庫である「貯語池」は、少なくとも日・独・英語間では「母語 vs. 外国語」という明確な境界線は引くことができない。そして、この「境界線の消滅」は、後で見るように私自身の「日本語教育理念」の基盤を成すのである。

## <5. 外言=記号的表層化>

かくて、私自身の中に「内言」として存在し始め、「言語的伝達意図としての空隙」を通し、「貯語池」範疇列から「立候補」・選択されてきた言語表現材料は、目的自然言語の構文規則に従って、「文」化・「テキスト」化される。潜在していた「内言」は、

外側から見えもし、聞こえもする「テキスト」となって外界に存在し始め、他者（私自身および物理的に他のヒト）との共有が可能になる。

## II. 「ことば化モデル図」から「日本語教育理念」へ

### 2.1 「貯語池」内での多言語の階層性：「母語 vs. 外国語」という境界線の消滅

さて、上記「ことば化モデル」がある程度ヒトの言語活動の叙述に成功しているとして、この1～5ステップがほぼ瞬時に、すなわち「無意識的」に走るのは、24年間のドイツ滞在の今では日常語としての独語を話す場合である。コンピュータ用語を比喩に使おうか。現在私の脳=ハードディスク上で最も頻繁に使われるソフトは、独語である。「学習機能」面からも一番上層部にあるようである。もし、「母語」という名称の中に、「それが幼年期に獲得された言語であるため最も省エネで話せる言語であり、その他の言語は何らかの『翻訳努力』が介入してくるので『外国語』である」という意味合いが含まれているならば、今の私にとってのドイツ語は、30歳になって始めた言語であるが、今では最も省エネで話せる言語である。言ってみれば『準母語』である。その他は日本語を含め『外国語』と呼ばざるをえないことになる。実際問題、例えば自分の専門分野についての話しをするときには、ドイツ語でやったほうがどれだけ楽であるかしれない。私の Macintosh のハードディスクには、日本語ワープロ・ソフトとして過去10年に Word-Perfect、Solowriter-Nices、EasyWordbridge、Word とこの順でインストールされてきているが、「母語機能」はもはや Word-Perfect にはなく Word 「母語」としてが取り仕切っているようなものである

日本語だけで話そうとすると、ところどころドイツ語から日本語に「翻訳」しながら、しかもしきりに正誤チェックをかけながら話している自分を意識する。例えば待遇表現レベルを間違えないように - 27歳で日本を離れた私は日本語のこの面に弱いのである - せっせと努力するのである。またこれはアメリカ滞在のときにも気がついたことであるが、日本人同士で会話をするとき、お互いに英語でやったほうが敬語の煩わしさを避けることができるので、英語を共通語に選ぶことが多かった。ドイツでも同様である。ドイツ語内には Du/Sie という親疎性によって二人称が変わることがあっても、日本語の敬語の複雑さを考えたら、よほど社会言語的なまちがいの恐れは少なくてすむ。

私の貯語池の中では英語に対する「外国語性」はもっと強くなる。英語は錆びついているのだ。話しながらしきりに「awkward 不器用な、気が利かない、ぎこちない、ぶざまな、具合の悪い」という形容詞が頭を過る。英語は錆びついているのだ。なぜ

「錆びついている」と感じるかといえば、ソフトの走りがスムーズでないからであり、「独語イズム」が発音・構文レベルでちらほら飛び出してくるのを抑えるのにエネルギーを使っているからである。また、トルコ語やフランス、イタリア語などでも習得が中途半端なので、それらの話者と対話する場合、私は「ことば化プロセス」の各段階で、混迷・遅滞・困惑・フラストレーション・絶望感を味わうことになる。これらの言語は私にとっては未だ「外国語性」が強いのである。

しかし表現選択・連辞がそれでは「母語・準母語」の中で全く混迷・遅滞・絶望感なしに行われるかということ、決してそんなことはない。たとえ母語であっても「ことば」という記号体系がそれ自体がどんなに「舌足らず」なものであるかは、私達は日常体験から十分に知っている。禅が言語そのものの記号性・二次体験性を見据えて、言語不信的な「不立文字」を立てたのもむべなるかな、である。そこまで極端に言語を否定しないまでも、日・独・英語表現を「詩的」に使ったり、学問的用語として使用したいからと検討する場合には、「自照的フォーカス」を当てて絞り込もうとするので、ヤコブソンの詩的言語機能の叙述を待つまでもなく、母語ソフトも「瞬時に」は走らない。検索をかけても「よっこらしょ！」と長くかかるケースがいくらでもある。

以上の考察点からしても「山田頼子の貯語池」の中では、「母語 vs. 外国語」という境界線が全く消滅していると言える。さて、かく言う私はたかだか2、3の言語を母語・準母語のように話すのにすぎず、上述の内省もあくまでも一個人の例にすぎないが、基本的にはヒトの貯語池の構築化は同様であろうと思われる。欧州での日常生活は、「母語 vs. 外国語」という二項対立式論理は無意味であると確信させるものである。ヒトは「母語」で考え、それを「外国語」に翻訳しながら話すのではない。言語獲得の「刷り込み期」の段階から他言語の貯語池を構築し続けているのである。そこで問題になるのは「母語性・外国語性」であって、『母語』対『外国語』という境界線はそもそも存在しないのである。

## 2.2 「ことば化モデル図考察」から「日本語教育理念」へ向けて

山田頼子というハードディスク内での「ことば化」では、上記のようにソフトの如何に関わらずさまざまな段階遅滞・挫折が起こる。精神的ストレスはむろん心地よいものではない。しかし反面、内言の表層化プロセスで自分自身が「言語的にどの段階でどのように挫折しているか」をじっくりと観察するのは、非常にスリリングなものである。中でも、示唆に富むのは、自然言語の習得過程（インプット）と外言化（アウトプット）との関係が如実に観察できる場合である。ヒトは自分が習ったように記号を再生するのであろう。

例えばトルコ語を私は右脳的・全人格的自然獲得法と、大学講義で左脳的・伝統的文型積み上げ主義的に2学期ほど習った。「貯語池」に蓄えられている量が少ないため語彙選択がうまく働かないが、号令をかけられ立ち上がってくるそれらの表現は大抵の場合前者インプットのものである。外言化の最終段階に来る発音も、私は5音階の民謡を歌うことを中心に覚えたのでトルコ人の耳には「上手に」響くらしい。日本語古層にあったであろう母音調和を忍び、かつ東北弁に存在する「イ・エの中間母音」を使いながらの外言化はつかえつかえであるにしても、嬉しい。逆にローマン系の言葉は、英語・ドイツ語を基盤にして左脳的に習ったため、語彙選択はなんとか見当がつくとしても表層文法構造で苛つく。KRASHEN<sup>4</sup>の言うところのモニターがかかりすぎるからである。「内在するはず」の文法についての知識が、<表現選択> から<形態・構文>への段階に直接結びついていかない苦悩を味わうことになる。

私がそもそもアメリカに渡ったのもこの文法知識は充分でも「聞けない・話せない苦悩」がきっかけであったのだ。今になって思えば、私もあの日本独特の「文法・文型積み上げ式英語授業」の一犠牲者であったのだ。しからば、その「犠牲者現象」から脱出し、英語にしてもドイツ語にしても「母語のように」楽に話せるようになったのなら、私の言語個人史は一つのケース・スタディとして外国語教育一般に生かせるであろう。これを生産的・建設的に「日本語教育の場」に生かすことは可能であろう。

かくて、私の個人史・学問的背景を基に、上述の「ことば化」問題を、日本語教育理念に収斂させることが可能になってくる。そこから必然的に出来てくる命題は以下の如くである。

『母語性に基づいた言語表現蓄積』は、日本語習得の刷り込み段階から可能であるか?』

実は、私はこの命題から「可能である」という「仮説」を立て、その「検証」をするため、主として「PDL(Psychodramaturgie Linguistique 心理ドラマ応用外国語教育法)」と「サジェストペディア」を採り入れた方法論で3年前から研究実践を続けている。いわゆる「オールタナティブ教育法」を統合化したこの方法論を私は「JaFIX (Japanisch als Fremdsprache mit Integrativ-Kommunikativen Schritten/Japanese as Foreign Language with Integrative-Communicative Steps 山田式日本語教育法)」と名付けた。JaFIX 方法論は、ベルリン日独センターを中心に実施され、私は2001年10月からはさらにJaFIX 日本語講師養成講座(20週・80時間)も担当している。この方法論の理念、具体的内容については別稿<sup>5</sup>を参照して戴くことにして、ここでは「仮説は肯定的に検証された」とだけ記しておこう。

## 結論: 「日本語教育理念」の発展的統合

私の「ことば化」というテーマ設定は、当初は私がここ15年以上に亘って取り組んでいる課題「新しい日本語教育を目指して」<sup>6</sup>とは無関係に考えついたつもりであった。しかし細川ワークショップ3日間及びその後の数日間に内省・考察を続けていくうちに、このテーマは巡り巡って今現在自分の取り組んでいる課題に直結してきた。つまり、日本に生れた私が歩まざるをえなかった「学校英語文法教育→米語獲得」という外国語習得上の回り道ではなく、初めから「獲得」の道を「切り開けないか、そのためにはどうすればよいか」という課題である。日本語学習者はそれぞれに「貯語池」を既に内在化してクラスに臨んで来るわけであるが、日本語表現も「色も匂いもある血の通ったことば」としてその刷り込み期段階から獲得・蓄積して行けないだろうか。私のこの課題への答えは上述したように「やり方次第で可能!」である。そのやり方を私は「JaFIX」として目下研究実践の真っ最中なのであるが、その「発展途上」にある私の方法論に対し、今回シンポジウムで呈示された「細川コンセプト」は、発展的統合性を啓示してくれた。細川方法論は、日本語教育の刷り込み期段階から「言語獲得」の方法論を実践しようとするJaFIXの発展段階のあり方を明快に打ち出してきたからである。あくまでも「個」を主体とし、当初から「ことば化」を最重要視するその方法論は、現行の文型・文法積み上げ主義のパラダイムの変換を根本から迫る。

さて、ヒトとは運命的な出会いをするものである。私の「ことば化」のテーマは、ワークショップ内で「ことば化」されることにより、小グループ内での魂をゆすぶられるディスカッションや内省をくぐった。そして「モデル図示化」され、さらに下記に図2として記すように「日本語教育方法論への発展的統合: 細川コンセプト・JaFIX・Dialog-Prozeß」を創出した。これには主題として「心からことばへ・ことばから心へ – 心とことばの対話」が付記されている。「発展的統合」は私と同様の教育理念を「Dialog-Prozeß」<sup>7</sup>として研究実践している Witten-Herdecke 大学の的場主真氏と「レポート宿題内容」について対話した結果である。

細川教授は、これまでのところ早稲田大学語学研究所では「日本語0レベルから3までの細川コンセプトは未遂行」だとおっしゃった。私はJaFIXの実践研究から、まさにこの初段階での初心者の「貯語池蓄積」が日本語習得環境を整備することに

「心からことばへ・ことばから心へ – 心とことばの対話」

- 日本語教育方法論への発展的統合: 細川コンセプト・JaFIX・Dialog-Prozess -



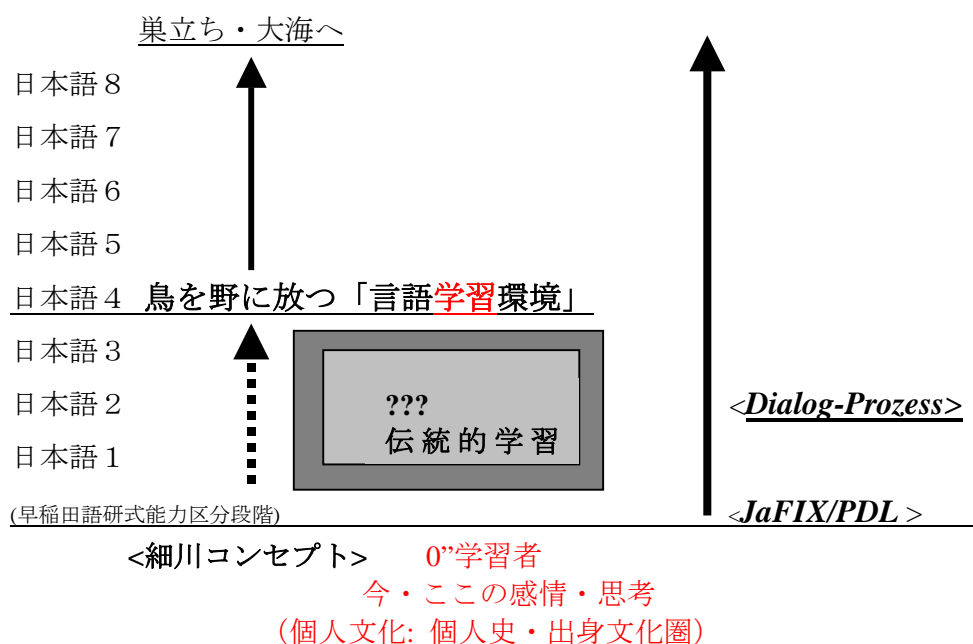


図 2: 日本語教育方法論への発展的統合: 細川コンセプト・JaFIX・Dialog-Process

よって可能であることを検証済みと信じている。

JaFIX 方法論のうちの「PDL」はあくまでも「学習者を<sup>シ</sup> Protagonist」として絶対視し、学習者の自主的 発話を待つ。その発話内容は学習者が「今・ここに」感じ、考えていることの「ことば化」である。PDL 方法論に沿って学習者が主体となって「自分のテキスト」として教師側の支援 - 細川教授がワークショップ中「足場掛り」と呼んでいた言語表現的サポート - を受けながら学習開始後 60 時間後には例えば下記のようなテキストを「口頭で」作りだす。これらは各学習者のテキストを担当教師が授業後「書記」になって書き起こし、「書字化+CD 音声テキスト」としてクラス内で共有したものである<sup>8</sup>。初心者として同じようにスタートを切った学習者たちが、どのくらい「十人十色ぶり」を発揮してそれぞれの「ことば化」を行っていくかがわかるであろう。そして各自の「内言の外言化」の結果の共有が「外言化による内言能力の拡大」に繋がっていくことも<sup>9</sup>。というのはこうして「自己のテキスト」を日本語で言ってみた学習者は、そのでき上がったテキストの「自己との直接の関わり性」のために、それらの日本語表現を彼ら自身の内省によれば「翻訳」でなく、「獲得」しているからである。つまり「貯語池」への蓄積が「母語のように」行われていくのである。

例 1: 難しい。心はドキドキ。言いたいことが言えない。日本語で言えない。わからない。頭の中はごちゃごちゃだ。いろいろなことが言いたい。心にいろいろなことが

ある。でも、できない。難しい。頭が痛くなった。

例2: 寒い。今日はとても寒い。手も足も冷たい。ほんとうに冷たい。今日は部屋が、寒い。リラックスの時に、寒かった。元気じゃない。暖かいマフラーをしているけれど、でも寒い。手が冷たい。足も冷たい。

例3: ああ、イタイ。お腹が痛い。そうだ。お腹が空いた。お腹がぺこぺこ。死にそうだ。早く食べたい。何を食べようか... そうだ! 「一心」に行ってお寿司を食べよう! お寿司が食べたい。お寿司が好き。痛い。お腹がぺこぺこ。早く何か食べたい。

例4: 武田先生、先生はベルリン映画祭 (ベルリナーレ) へ行きましたか?

僕は、木曜日にベルリン映画祭へ行った。授業の後で行った。バレンタイン・デーのサプライズのプレゼントで券(チケット)をもらったからだ。中国の映画だった。タイトルは「...???...」。映画はとてもよかった。

今年のベルリン映画祭の <sup>ゴールデン・ベア賞</sup> 金熊賞には宮崎駿監督の映画が選ばれた。『千と千尋の神隠し』というアニメの映画だ。インターネットのサイトは [www.sentochihiro.com](http://www.sentochihiro.com) だそうだ。僕も見なかったけど、券が手に入らなかった。券は売り切れだった。残念だった。

例5: 今日は身体全体が痛い。手が痛い。腕も、そして腰も痛い。空手の稽古をしたから、痛い。でも、僕は日本のスポーツが好きだ。剣道に空手道。柔道はしない。でも、空手はもう長いことしている。13年だ。もう僕は先生だ。僕は強い。毎日稽古をしている。練習している。だから、今日は身体全体が痛い。僕は日本のスポーツが好きだ。

例6: 穴が、ない! この仮面は、穴がない! だから見えない! 部屋が見えない。先生も友達も見えない。ほんとうに何も見えない。私の眼鏡は、どこだろう? 見えない! 眼鏡は、どこ? どこ? ああ、あった! 眼鏡があった! 眼鏡は私の前にあった! あー、よかった!

私は、このレポートを「『ことば化』とは『表層言語表現の起ち上がりプロセス』であると定義しておく」という「動機」で書き始めた。そこでレポートを終えるに当たり、以下の2点を付け加えておこう。私の考える日本語教育が「何をめざすか」を自他に明言するためにも。

- (1) 「ことば化」の内容的原点は、「今・ここで」の感情・思考を他者と共有したいという願望にある。
- (2) 「ことば化」の資源的原点は各個人に内在する「貯語池」であり、ここに「母語のように」言語表現を獲得・蓄積していくことが「内言・外言」を豊かにしてい

く。

以上

---

<sup>1</sup> 細川英雄(2002)『日本語教育は何をめざすか: 言語文化活動の理論と実践』明石書店, 97 – 104.

<sup>2</sup> JAKOBSON, Roman (1960) „Closing Statement: Llinguistics and Poetics“ in SEBEOK, Thomas, ed. *Stile in Language*. New York: Sebeok; KOCH, Walter A. (1983), *Poetry and Science: Semiogenetic Twins – Towards an Integrated Correspondence Theory of Poetic Structures*. Tübingen: Narr; YAMADA-BOCHYNEK, Yoriko (1985), *Haiku East and West – A Semiogenetic Approach*. Bochum: Brockmeyer. ヤコブソンの「両軸理論」に関しては HOLENSTEIN, Elmar (1975), *Roman Jakobsons phänomenologischer Strukturalismus*. Frankfurt a. M.: Suhrkamp.

<sup>3</sup> LORENZ, Konrad (1973), *Die Rückseite des Spiegels: Versuch einer Naturgeschichte menschlichen Erkennens*. München: Piper; BARTHES, Roland (1975), *The Pleasure of the Text*. Trans. By Richard Miller. New York: Bill and Wang. KRISTEVA, Julia (1980), *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*. Transl. By Thomas Gora/Alice Jardine/Leon S. Roudies. Edit. By Leon S. Roudies: Oxford: Blackwell.

<sup>4</sup> KRASHEN, Stephan O. (1981), *Second Language Acquisition and Learning*. Oxford: Pergamon P.

<sup>5</sup> YAMADA-BOCHYNEK, Yoriko (2002), “「刷り込み期」が勝負！日本語教育土台構築への一試案: 山田式 日本語教育法 JaFIX (Japanisch als Fremdsprache mit Integrativ-Kommunikativen Schritten/Japanese as Foreign-Language with Integrative-Communicative Steps)実践-結果とその記号論的考察 – ドイツ語母語者における「日本語プロゾディー獲得」を中心に –“ in *AJE, Proceedings 2001 Cambridge*. (In printing).

<sup>6</sup> SCHULTE-PELKUM, R./YAMAGUCHI, I./YAMADA-BOCHYNEK, Y. (1991), *A New Approach to Teaching Japanese: 『新しい日本語教育を目指してードイツのヤポニクムでの実践例』* Bochum: Brockmeyer

<sup>7</sup> 的場主真氏は、Dialog-Prozess の基本原則として下記の6点をあげる。

- ① 相手の意見の絶対的尊重;② 「判断保留」; ③心から話す; ④心から聞く;
- ⑤ 「思考<sup>ていげん</sup>通減Slow-thinking」の発見; ⑥ 話しながら考え、考えながら話す

比較参照:- 中野民夫(2001)『ワークショップ-新しい学びと創造の場』岩波新書新赤版

- DHORITY, Lynn Freeman (1998), *Joyful Fluency*. Brain Store Inc.

<sup>8</sup> 現行ベルリン日独センターJaFIX 日本語講座 GI(2001年10月23日より開始。毎週火・木曜日 17.30 – 19.30)より。担当講師: Krebs-Takeda Yumiko 氏と早崎由加里氏の2クラス。テキストは2002年2月19日及び21日に「PDL-Triade 段階」に創られたもの。JaFIX コンセプトについては *Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin*: <http://www.jdzb.de/>

参照。

<sup>9</sup> 細川(2002)上掲書, 100 – 105 参照。